2008年度事業報告書

人々の「ために」ではなく、人々と「ともに」

特定非営利活動法人
アジア日本相互交流センター・ICAN（アイキャン）

2008年　事業報告概要、及びご挨拶

アイキャンは2008年も多くの個人、学校、団体、企業、行政の「できること(ICAN)」を持ち寄って、様々な活動を展開することができました。ここに皆様への感謝をこめて、2008年度のご報告をさせていただきます。

「危機的状況にある子ども達とともに行う教育プログラム」では、例年通り一人でも多くの子どもが学校に行けるように通学支援と学校機能の強化を行いました。ジェネラル・サントスでは、96名の奨学生の通学支援を行い、小学生18名、高校生4名が念願の卒業式を迎えることができました。路上の子ども達の事業では、「元路上にいた子どもたち」の通学支援に加え、「今現在路上にいる子どもたち」の路上教育や炊き出しを行いました。ミンダナオの先住民族ブラアン族の子どもの学校給食活動は、ヤギの飼育と学校菜園の成功でより持続可能な活動になりつつあります。また、「先住民族ドゥマガット族の子どもたち」の事業を行ってきたサンイシロでは、長年行ってきた事業の評価を住民のみなさんと行いました。60万人もの避難民が発生したミンダナオ島ピキットでの「紛争の影響を受けた子どもたち」の事業では、戦闘によって精神的にも身体的にも影響を受けた子ども達の心理トラウマからの回復の活動や炊き出し、食料の配給を中心に緊急支援活動を行いました。

また、この「危機的状況にある子ども達とともに行う教育プログラム」では、フィリピン各地から危機的状況に置かれた子ども達が集まり、社会を良くしていくための行動計画を作る「アイキャン子ども議会」も開催されました。これは、子ども自身が社会を分析し、社会をよくしていく活動の主人公になることを重視するアイキャンのこれからの活動の方向性を示すものとなりました。

「ごみ処分場周辺での地域開発プログラム」では、フィリピン最大のごみ処分場に一番近いケアセンターが、より住民主体の医療機関となるように、協同組合の組織化を進めました。2010年には、資金運用等の事業運営面も住民主体で行えるように目標を掲げています。これは、社会的にも意義深く大きな挑戦です。また、住民からの技術訓練のニーズを元に、職業技術訓練を本格的に開始しました。さらに、子どもの安全を守り、安心してお母さんが働けるように、「預かり保育」を始めました。

「相互理解を促進するプログラム」では、国際理解教育の授業やフェアトレード、街頭募金やイベントを今年も多数行いました。特に、日本とフィリピンの子どもたちが描いた5，000枚の絵手紙展示会やフィリピンの子どもたちとの交流を目的とした「子ども使節団」を行うなど、青少年育成に力を入れました。

「組織運営面」では、事務局長を設置し、より計画的、効率的に事業を進めることができるようになりました。メディアで取り上げていただくことも多くなり、新聞だけでも11回掲載していただきました。運営資金面に関して、当期収入額は28，413，734円、支出は24，547，767円の黒字決算となり、その結果2009年への繰越金は前期からの繰越金と合わせて9，483，794円となっております。また、当期正味財産合計は昨年度の11，385，792円から15，100，056円へと増加しております。

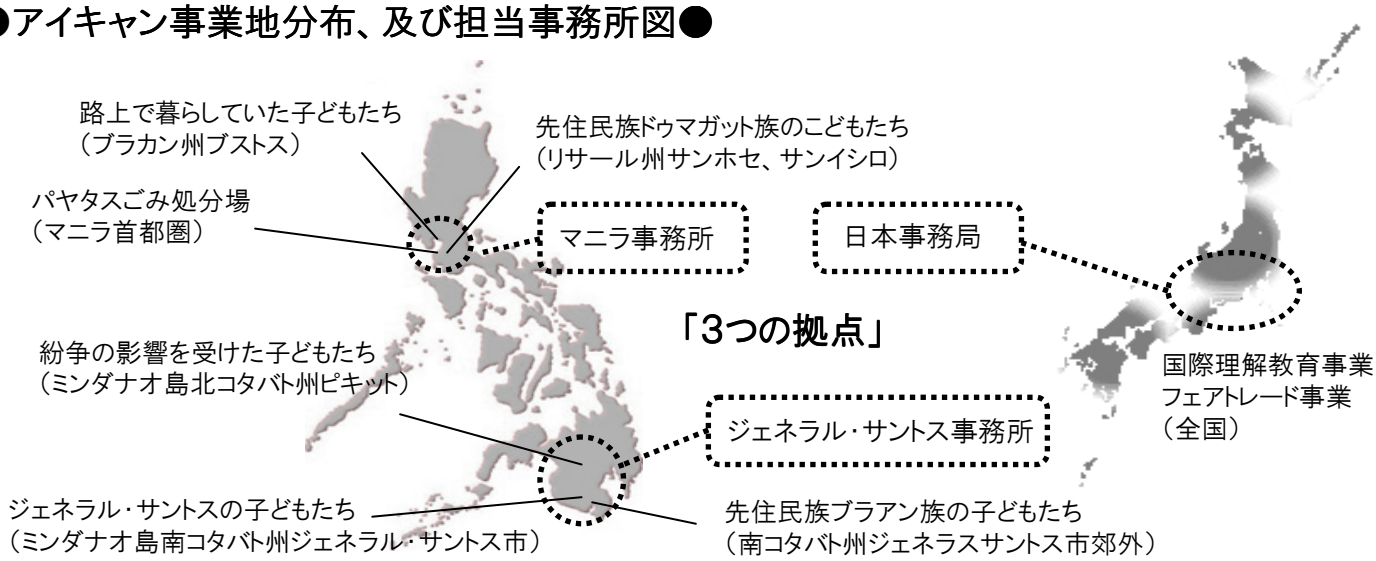
このように2008年はアイキャンにとって多くの新しい試みがなされた1年となりました。成果を言葉にして報告書としてまとめると、それぞれの事業は単なる1ページや2ページに過ぎないのかもしれません。しかし、そこに書かれている1行1行の活動を実施していく道のりには、多くの人々の夢があり、汗があり、涙があり、そして知恵と努力があります。経済政治状況も大きく変容していく中、会員さんや寄付者、ボランティアさんや賛同者の皆さん、企業、行政、学校、助成団体、アイキャンの理事や日本人・フィリピン人スタッフ、そして事業地の子どもや大人が「できること(ICAN)」を持ち寄り続けたからこそ、その1行の活動が生まれ、「貧困」や紛争のない平和な社会に 1 歩近づくことができたと感じています。

ここに、多くの人々によって成し遂げられた2008年度の活動の成果を皆様にお届けいたします。その文字の奥で実際に活動している事業地の人々や会員さん、寄付者、助成委託団体の皆さん、ボランティアさん、アイキャンのスタッフなどの顔を想像して一読していただければと思います。

ありがとうございます。
代表理事　田口　京子

Not 'for' the People, but 'with' the People
人々の「ために」ではなく、　人々と「ともに」

●アイキャン事業地分布、及び担当事務所図●



特定非営利活動法人

アジア日本相互交流センター・ICAN（アイキャン）

設立：1994年4月1日

郵便番号：453-0021

住所：愛知県名古屋市中村区松原町1丁目24番地

地域密着型ビジネス支援施設内N103

（名古屋駅から地下鉄東山線で2駅目にある「本陣駅」

3番出口から徒歩 1 分になります。）

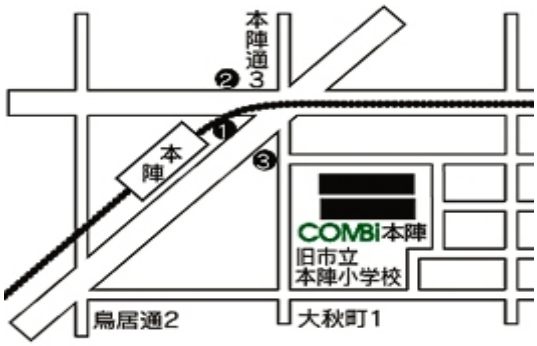
＊2008年4月1日より、事務所が新しくなりました。

電話番号＆FAX：052－908－9314

Eメールアドレス：info@ican.or.jp

ホームページ：http//:www.ican.or.jp

郵便振替：00850－6－78233



【代表理事】

田口京子　養護学校教諭

【 理 事 】

雨森孝悦　日本福祉大学教授、日本NPO学会理事、
（特活）シャプラニール監事

伊藤洋子　（特活）SHARE（シェア）東チモール駐在員

小薗直樹　地球アカデミア運営委員、会社員

鈴木真帆　（財）結核予防会　フィリピン駐在員

高畑　幸　広島国際学院大学現代社会学部教員、
フィリピン学会所属

高野　翔　日本事務局職員

早川　潔　会社員

松浦宏二　（特活）チャイルド・ファンド・ジャパン
リエゾン事務所プログラムオフィサー

宮脇聡史　東京基督教大学准教授、東南アジア学会

【 監 事 】

龍田成人　（特活）名古屋 NGO センター副理事長

林　俊彰　税理士

●フィリピンNGO・学校のパートナー●　（他多数）

団体・機関名	事業名・事業内容
Balay Rehabilitation Center, Inc	教育プログラム　ピキットの紛争の影響を受けた子どもたち
Bahay at Yaman ni San Martin de Porres	教育プログラム　ブストスに住む路上で暮らしていた子どもたち
Polytechnic University of the Philippines	パヤタスでの医療事業における協同組合設立
University of St. Tomas (UST)	パヤタスでの医療事業におけるコミュニティ薬局設立

●メディア掲載●

日時	媒体名	題名	内容
7 月 15 日	中日新聞	思いを音楽に託して	国内活動
7 月 24 日	読売新聞	人・世界が舞台　貧困問題に立ち向かう	ICAN職員の特集
7 月 28 日	朝日新聞	日比の子、結ぶ絵手紙	子どもの参加事業
8 月　5 日	中日新聞	フィリピンの子供へ届け募金活動	子どもの参加事業
8 月 26 日	中日新聞	ミンダナオの避難民緊急支援の寄付を	ピキット事業
10 月 28 日	マニラ新聞	第一回子ども議会開催	子どもの参加事業
10 月 30 日	東海ラジオ	小島一宏の morning　あい land	子どもの参加事業
10 月 30 日	中日新聞	日本とフィリピン子どもらの絵手紙～5000 枚緑区で展示～	子どもの参加事業
10 月 30 日	朝日新聞	絵手紙　日・比の違い見て～NPO、名古屋で 5000 枚展示～	子どもの参加事業
12 月　2 日	中日新聞	迷っているなら、まずやってみて	ICAN職員の特集
12 月 27 日	朝日新聞	理想の地球　比で語ろう。～路上生活の子らと交流～	子どもの参加事業
12 月 28 日	中日新聞	中学生の使節団が子どもたちと交流	子どもの参加事業

●参加ネットワーク●

ネットワーク・団体名	所属・担当	詳細
(特活)国際協力NGOセンター(JANIC)	正会員	・全国規模のネットワーク型NGO
(特活)名古屋NGOセンター	正会員	・中部地域のネットワーク型NGO
2008年G8サミット　NGOフォーラム	サポートNGO	・G8サミットに向けて結成したNGOネットワーク ・貧困・開発ユニット。(G8閉幕に伴い、解散)
フィリピン日本パートナーシップ(PJP)	メンバー	・フィリピンNGOと日本NGOが集うネットワーク
在フィリピン日本NGO懇談会	世話人	・在フィリピン日本NGO間のネットワーク ・世話人のうち、2名がアイキャン職員、1名理事。
ハロハロメーリングリスト	管理人	・フィリピンの開発関係者のメーリングリスト。 ・管理人2名のうち、1名がアイキャン職員。
フェアトレード研究委員会	メンバー	・日本のフェアトレード専門家が集う研究会
CWC (Council for the Welfare of Children)	メンバー	・子どもに関する開発や福祉に関わるフィリピン政府機関やNGOが参加するフィリピン政府主導のネットワーク。

●助成事業・委託事業のパートナー●

団体・機関名	事業名・事業内容
(独)国際協力機構(JICA)草の根技術協力 (2007年11月～2010年10月)	パヤタス地区における地域型保健事業および生計向上事業 -ごみ処分場閉鎖対策として-
公益信託　今井記念海外協力基金 (2008年4月～2009年3月)	フィリピンミンダナオにおける共生のための教育事業
公益信託　愛・地球博開催地地域社会貢献基金(2008年4月～2009年3月)	子どもがつくる新しい地球のカタチ ー持続可能な社会構築のための子どもの参加ー
(財)愛知国際交流協会(AIA) (2008年4月～2009年3月)	フィリピンミンダナオ島の子どもの通学支援事業
(財)結核予防会結核研究所(JATA) (2008年4月～2009年3月)	フィリピンにおける都市コミュニティでの結核対策事業
草の根市民基金ぐらん (2008年4月～2009年3月)	フィリピンミンダナオにおける平和構築事業
(特活)アーユス仏教国際協力ネットワーク (2008年9月～2009年3月)	フィリピンミンダナオ島における緊急支援

ICAN 私にできること

アイキャンは多くの人の「できること・ICAN」を持ち寄って活動しています。みんなの「ICAN」が増えることで、フィリピンの子どものたちの笑顔も増えます！ここでは 2008 年の笑顔の源の活動をご紹介します！

街頭募金の実施

月に１回ほぼ毎月、街頭募金を行いました。毎回、多くの方が募金をしてくださいました！

交流会の開催

月に１回、ボランティアグループの交流会を開催しました。計画に基づき、この１年、街頭募金や勉強会を企画・実施！

勉強会の開催

ボランティアグループの企画・主催で、ミンダナオ紛争についての勉強会を開催しました。

フェアトレード

名古屋・東京において、ブース出店を行いました。商品を、より多くに方に知っていただく機会になりました！

絵手紙大会

絵手紙展示会の準備・運営でも大活躍！深夜のイオンにおいて、徹夜で 5,000 枚の絵手紙を貼りました！

フィリピンとの交流

日頃の日本での活動の様子を、写真で紹介したものを、現地スタッフ来日時に手渡しました。

初めまして！ICAN

アイキャンの事業説明会を、ボランティアグループが企画・運営。今年度は３回開催し、新しいメンバーがたくさん増えました！

事業地にて

フィリピンでは、医療事業やフェアトレード事業等の運営において、スタッフとともに、核となり活躍しています。

マニラ事務所にて

事業地だけではなく、事務所においても会計などの組織運営においても重要な役割を担っています。

すべての活動は、「現状」を変えなければいけないと思った人が、
はじめの１歩を踏み出した瞬間に始まります。

危機的状況にある子ども達と「ともに」おこなう教育プログラム

1、フォーマル教育支援事業（通学支援）

a、ジェネラル・サントスの子どもたち

（1） 事業概要

ミンダナオ島の南部に位置するジェネラル・サントス市は、人口41万人、世帯数9万の地方都市です。ツナやパイナップル、ココナッツなどの海産物・農産物が豊かに収穫できますが、大農場や工場を持つ一握りの資本家への富の集中が顕著で、多くの人びとが厳しい生活状況のなかにいます。毎年のように市内で無差別爆破事件が起こり、治安情勢も不安定です。アイキャンは同市に住む経済的に困難な状況にある家庭の子どもたちの通学支援を実施しました。

（2） 実施体制

マニラ事務所が管理運営、ジェネラル・サントス事務所が実施

（3） 実績

1） 教育支援

1月から3月末までは108名（小学生47名、高校生56名、大学生5名）、4月の卒業式以降12月までは96名（小学生29名、高校生63名、大学生4名）の子どもたちに制服、学用品、かばん、靴などの支給や、学費、通学交通費、プロジェクト費、卒業経費を補助し、子どもたちの通学を支援しました。その結果、小学生18名、高校生4名が無事学校を卒業しました。

2） 緊急支援

1月、虫垂炎に罹った1名の奨学生に対して、入院と手術にかかる諸費用を提供し、その結果その奨学生は復学を果たすことができました。

3） モニタリング

ジェネラル・サントス事務所スタッフによる家庭・学校訪問により、子どもの学習態度や成績について確認するとともに、学校や家庭での問題の相談に乗り、解決に努めました。5月に「子ども集会」を開催し、保護者、子どもたちとともに、事業を振り返り、また今後について話し合う場を持ちました。同時に、卒業生や学業成績の優秀な子ども、学校外の活動に意欲的に取り組んだため表彰を受けた子どもたちをともに祝いました。

4） プログレスレポート発送と手紙やカードでの交流

7月、12月と子ども全員の成長記録と子どもの手作りカードを日本のパートナーさんに送りました。また日本のパートナーさんから届いた計30通のお便りを子どもたちに届けました。

5）ノンフォーマル教育

6月、18名の高校生がワークショップに参加し、学校や家庭での悩み事を打ち明けられる仲間を創りました。

（4） 特記事項

2008年は高校生たちのワークショップを通して、より深く子どもたちの苦悩と闘いについて知ることになった1年でした。子どもたちは仲間に自分自身のこと、自分の想い・考えを共有することで、互いに励ましあい、力を得ることができ、このような場を作る重要性を改めて認識しました。

（5） 2009年の展望

高校生のアイキャン奨学生を中心とする青年たちが、演劇を通して自分自身を表現する力を身につけ、よりよい社会を作るための自分たちの想いを形にします。また市内の先住民族やキリスト教徒、イスラム教徒の相互理解の促進に努めます。

b、ピキットの紛争の影響を受けた子どもたち

（1） 事業概要

ミンダナオ島北コタバト州ピキットに住む人々は、長年続いてきた武力紛争により避難を繰り返してきました。アイキャンは、復学を望む子どもたちが増えるピキットの川沿いの7集落で2006年より、小学校の校舎の修復作業を通した地域の平和活動を促進してきました。2008年8月、人々との平和への願いとは裏腹に政情が急変し、政府とMILF（モロイスラム解放戦線）の間で武力衝突が再開してしまいました。60万もの人びとが自分たちの村から逃げ、劣悪な環境での避難生活を余儀なくされました。緊急の対応として、当初計画していた学校設備改善の事業を変更し、この度戦闘の混乱と避難を経験したピキット北部の村で、子どもたちの精神的身体的ニーズに答える支援活動を行いました。

（2） 実施体制

マニラ事務所が管理運営、ピキット駐在スタッフが現地NGO Balay Rehabilitation Center, Inc（以下、バライ）と共同実施

（3） 実績

1） 紛争下における緊急支援活動

● 10月ピキット北部のタケパン村とダレンガウェン村、カラカカン村において、食糧を提供し、また子どもたちが紛争の体験を共有することによって心理的ストレスから解放される為の活動を実施しました。同時になぜ紛争が起こったのかを冷静に学ぶ平和学習も行いました。0歳から17歳の子どもたち約450名が参加しました。

2） 日本国内における活動

● 毎月日本のボランティアグループが街頭募金や勉強会を通して、市民にミンダナオ紛争の現状を訴え意識を高める活動を実施しました。

● 「『バナナの島を平和にしよう』キャンペーン」と題しインターネットを媒体とした「署名活動」や「クリック募金」を実施し、より多くの市民が参加できる平和創りの機会を作りました。

3） モニタリング

アイキャンピキット駐在スタッフとアイキャンマニラ事務所、日本事務局、バライ本部、バライ現地事務所が密に連絡を取りながらモニタリングを実施しました。

4） ニュースレター発送と手紙や絵での交流

3月、10月、12月にキッズパートナーさんへニュースレターや子どもの手作りカードを発送し、日本からはパートナーさんから寄せられたカードや手紙をピキットの子どもたちに届けました。

（4） 特記事項

「元紛争地」であったピキットが、8月に再び「紛争地」となってしまいました。踏みにじられてしまった地域の人びとの平和への想いや子どもたちの経験を、キャンペーンなどを通して広く伝える努力をしました。また、新しくピキット出身のスタッフが加わったことで、事業がより円滑に進むようになりました。

（5） 2009年の展望

2009年は治安状況を見極めながら、再びピキットの川沿いの7集落において、学校設備の拡充を行います。また地域の平和活動を支援し、子どもが安心して学ぶことのできる環境を確保します。日本での平和キャンペーンを継続しつつ、ピキットでは教育を通した平和構築を進めていきます。

c、路上の子どもたち

（1） 事業概要

フィリピンでは約25万人の子どもたちが様々な理由で路上での生活を余儀なくされており、多くの子どもたちは路上での物乞いや、物売り、小売業や乗り物の運転手の補助、廃品回収業や車の見張り、性産業等により生きる糧を得て、命の危険と隣り合わせの生活を送っています。その中には、空腹を満たすためにシンナーを吸引したり、生き残るためにギャングの一員となって罪を犯してしまう子どもたちもいます。アイキャンは、このような路上での苛酷な環境での生活を強いられている子どもたちに対して、教育と養育の活動を実施しました。

（2） 実施体制

アイキャンの路上担当者（ストリートエジュケーター）が中心にマニラ事務所が管理、運営。通学支援に関しては「子どもの家」を運営するフィリピンのNGO、Bahay at Yaman ni San Martin de Porres（以下、サンマルティン）と共同実施。

（3） 実績

1） 路上教育及び炊き出し活動

マニラ首都圏の路上の子どもたち114名に炊き出しを、73名に路上教育を実施しました。特に子どもたちとの関係作りを行ったブルメントリット、フィルコア、アラネタ地区では、子どもの権利や麻薬やシンナーの害についての路上教育に重点を置きました。

2） 通学支援

「子どもの家」に住む高校生3名と小学生9名の計12名の奨学生に対して学用品・制服・学校諸費や養育にかかる費用を提供しました。うち1名が3月に無事小学校を卒業し、その他子どもたちも6月に進級しました。飛び級テストに合格した子どもも1名いました。また、「子どもの家」を出て家族のところへと戻ったり、他の施設へ移動した子どもは3名でした。

マニラ事務所のソーシャルワーカーが随時「子どもの家」や学校訪問を行い、それぞれの子どもの相談に応じ、学業成績や生活態度のモニタリングを実施しました。

3） ニュースレターの発送

6月と12月に日本のパートナーさんへニュースレターを発送し、活動の進捗やフィリピンの路上の子どもたちの現状について報告しました。

4） ノンフォーマル教育

6月に「子どもの家」の15名（うち3名が奨学生）がワークショップに参加し、子どもの権利について学びました。

（4） 特記事項

「子どもの家」の子どもたちの中にも、家族の住む家や他の施設、また路上を行ったりきたりする子どももおり、「路上の子どもたち」の事業は、様々なレベルの子どもに見合ったかつ包括的な介入が必要とされています。2008年はこれまでの以前路上にいて現在は施設にいる子どもたちの通学支援から、今現在も路上で暮らす、あるいは働く子どもたちへの直接的介入へと活動を広げることができました。

（5） 2009年の展望

今後は、ソーシャルワーカーと路上担当者（ストリートエジュケーター）各1名を1チームとするチーム制により、さらに路上での活動を充実させ、子どもたちが適切な生活環境を確保し、教育の権利も享受できるように、一人ひとりのニーズに対応します。

d、ジェネラル・サントスの先住民族ブラアン族の子どもたち

（1） 事業概要

ミンダナオ島ジェネラル・サントス郊外の村に住むブラアン族は、独自の文化・慣習を持ち、主に畑作や炭焼きなどを生業として、山岳地帯に住んでいる先住民族です。人々は、1970年代以降、深刻化してきた不法伐採や入植者による土地収奪により生活が脅かされており、農耕や採取を基盤とした自給自足の生活が成り立たなくなっていった今、食にこと欠く家族も多いのが現状です。子どもたちの多くは空腹により通学意欲を失い、せっかく入学しても途中で退学し、卒業まで通学できる子は一握りにすぎません。学校から遠ざかった子どもたちは、親とともに農業に従事したり、村を出て市内中心部で、家事手伝いなどの仕事に就き、法外な低賃金を稼ぎながら、苦しい家計を助けます。このような状況を改善するために、アイキャンは空腹のために勉学に集中できない子どもたちの通学意欲を高めることを目的として、2つの小学校において学校給食を実施しました。

（2） 実施体制

マニラ事務所が事業管理、運営。ジェネラル・サントス事務所が学校教員、PTAと協力して実施。

（3） 実績

1） サンホセ小学校での学校給食

実施回数合計（1月～12月）37回　対象児童：100名

2） ダアン・バンワン小学校での学校給食

実施回数合計 （1月～12月）34回　対象児童：100名

3）やぎの飼育 （サンホセ小学校）

今期やぎを売って得た収入で、給食にかかる経費を一部捻出することができました。購入や繁殖によりやぎは前年の6頭から17頭に増え、飼育場も拡大しました。

4） 学校菜園活動（ダアンバンワン小学校）

6月に子どもたち、保護者や先生がともに畑を耕し、かぼちゃ、豆、チンゲンサイ、トマト、なす、ヘチマなどの野菜を植えて育てました。これらを収穫し、随時給食の材料として使えるようになったため、限られた経費でより多くの子どもたちに給食を提供できるようになりました。

5） モニタリング

ジェネラル・サントス事務所スタッフが随時小学校を訪問し、進捗状況を把握、またマニラ事務所スタッフが、運営を担う先生や生徒の保護者と話合いを持つことにより、モニタリングを行いました。

6） ノンフォーマル教育

8月に低地や山奥に住むブラアン族の子どもたち15名が相互理解ワークショップに参加し、コミュニティの課題や夢について話し合い、ブラアンとしてのアイデンティティを前向きに捉える場を持ちました。

（4） 特記事項

学校菜園ややぎ飼育を通して、先生や保護者の関係が強化されました。それぞれ活動がより効率的、持続的になるよう提案し、その実現に協力して取り組んでいます。

（5） 2009年の展望。

学校給食活動が、やぎ飼育と学校菜園の成功により、より持続可能な活動となってきました。2009年はより多くのブラアンの学校に生計向上活動を広げ、それぞれのニーズを自らで満たしていける力をつけるために、活動を充実させていきます。

e、サンイシロの先住民族ドゥマガット族の子どもたち

（1） 事業概要

リサール州アンティポロ市にあるサンイシロ村には、先住民族（ドゥマガット族）の血をひく人々が多く住んでいます。人々は主に焼畑や稲作などの農業で生計をたてていますが、収穫は十分でなく、雨季になると地理的に孤立してしまうなど、厳しい環境に置かれてきました。子どもたちは経済的、地理的、社会的な理由で、高校卒業まで通学できないケースは限られているために、アイキャンは高校通学支援を実施しました。また現在までに農業に取り組む住民組織を通じて生計向上の活動を進めてきました。2008年は、継続して、学校に通うための高校生の通学支援と、同時に学校外での課外活動を通じての教育活動を行いました。また、これまでの長年間実施してきた事業を振り返る評価会議を行いました。

（2） 実施体制

マニラ事務所が村の住民組織MASAKAや学校の教師と連携して事業を実施、管理。

（3） 実績

1） 通学支援

2008年1月の時点で奨学生は計8名で、3月に1名が無事高校を卒業しました。4月以降は6月の新学期に向けて高校生7名に対して学用品や制服を提供しました。また学校諸費や卒業手続き費用を支援しました。

2） モニタリング

子どもと保護者、村の人々（住民組織メンバー）、教師とのミーティングを、集落や学校にて行うほか、家庭訪問による懇談を随時行いました。

3） ノンフォーマル教育

9月に元奨学生2名を含む奨学生9名が集まり、山岳地帯に住む子どもたちの生活や課題を話し合いました。自らの文化を再評価すると同時に、自分自身を表現する力を高め、自信をもって外の人びとと接する力を養いました。

（4） 特記事項

12月には、住民組織リーダーや元奨学生とともに長期事業評価を行いました。その結果事業開始からこれまでの間に、対象地域の大多数の家庭の子どもがアイキャンの活動により通学し、高校卒業によって、家族の収入向上につながる雇用機会を大きく広げることができていること、教育の大切さを親に伝えることができたことを確認しました。また以前アイキャンを通じて無農薬農法の訓練を受けた住民組織MASAKAのメンバーの90%が現在は完全無農薬農法を実践しており、その為高価な農薬を買う必要もなくなり、毎年返済に苦しんでいた借金がなくなったことも分かりました。また、それらに加えて、果樹の苗の配布やバイオガス作りなど通じた生計向上活動によって、サンイシロ･リビス地区を中心とする住民たちの生活が確実に改善されたことが確認できました。

（5） 2009年の展望

2009年は、既存の奨学生たちの通学支援を継続し、高校卒業を目指すとともに、住民組織MASAKAの組織強化を行います。農業に取り組むこの組織は、農業についての技術は専門組織の協力を得て向上させているものの、組織運営自体の力は依然として十分ではありません。その組織強化への取り組みを支え、持続可能な活動を目指します。

2、ノンフォーマル教育事業　3、アドボカシー事業（＝子どもの参加を促進する事業）

（1） 事業概要

アイキャンが事業の中で出会ってきた子どもたちは単に教育や医療等の社会サービスへのアクセスが欠如しているのみならず、経済・政治・社会文化といった枠を超えて包括的に「力」を発揮できない場所に置かれていました。そしてその「力」の欠如こそが、子どもたちを統計にも反映されない「声のない存在」へと追いやり、直接的・間接的な暴力（紛争や貧困等）に寛容な社会を作り出しています。

この認識に立脚し、アイキャンは貧困削減の具体的な1つの方法として「子どもの参加」を促進し、危機的状況に置かれた子どもたち自身が、自分たちの目でみた社会を分析し、自身の言葉で表現し、伝える力を養いました。

（2） 実施体制

フィリピンの様々なNGOや政府機関と連携をしながら、マニラ事務所が事業実施、管理。

（3） 実績

1） ノンフォーマル教育

8つの異なる背景を持った子どもたちがそれぞれの地域で集まり、子どもの置かれた現状を自らの言葉で仲間に語り、身の周りで起きている事を客観的に理解し、それに対しての解釈や改善策について話し合いました。

① ジェネラル・サントスの子どもたち(6月)

ジェネラル・サントスの奨学生である高校生たち18人が、自分たちの抱える課題について共有し合いました。経済的困窮の中で子ども自身も闘っており、さらに家庭内暴力も経験しているケースも少なくないことが分かりました。

② ピキットで紛争の影響を受けた子どもたち(10月)

タケパン村とダレンガウェン村、カラカカン村の約450人の子どもたちが、紛争時の経験を振り返り、共有することにより、心的苦痛を取り除く活動に参加しました。またどうして紛争が始まるのか考え、このたびの紛争のきっかけとなった協定について学びました。平和な落ち着いた暮らし、日常的に学校に通える暮らしを切望していることが、活動中に子どもたちの描いた絵に表れていました。

③ 路上の子どもたち(6月)

「子どもの家」のアイキャン奨学生を含む15人の子どもたちが、子どもの権利について考える勉強会を実施しました。適切な住まい、適切に養育してくれる家族、名前が与えられること、治療が受けられることなどの、多くの権利を享受できないことがいかに辛く苦しいものであるか、子どもたちが経験を共有しあい、だからこそひとつひとつの権利に重みがあることを学びました。

④ 先住民族ブラアン族の子どもたち(9月)

ミンダナオ島ジェネラル・サントス周辺の村に住むブラアンの3つの地域から集まった16人が、自分たちの文化を見直し、地域の夢を語るワークショップを行ないました。差別を乗り越えて、自分たちの文化を誇りに思うべきだという、前向きに自らのアイデンティティを捉えようとする子どもたちの努力が見られました。

⑤ 山村サンイシロに住むドゥマガット族の子どもたち(10月)

9人の元あるいは現役奨学生が集まり、自分自身、家族、地域について考え、発表し合いました。地域の課題として、電気が通ってないこと、道路の未整備、医療・教育施設の不足などの意見が出てきました。

⑥　パヤタスごみ処分場周辺の子どもたち（8月）

青年部（14-17歳）の12人、少年部（10-13歳）の22人が参加し、自分自身をみつめ、自分達の地域、ゴミ山について考え、また地域の課題を共有しあいました。ゴミ山について子どもたちは、危険で有害であり、差別の原因となるものとして否定的に捉えると同時に、生計の場、生活の場として肯定的にも捉えていることが分かりました。

⑦　身体的障がいを持つ子どもたち（8月）

パートナー団体「愛の家」の施設の子ども14人が、自分について、家族について見つめなおし、どのような社会を望んでいるのか、夢を語りました。望んだ職業に就けること、環境を守ること、教育環境が整うこと、障がいを持つ人々への理解が広がることなどが子どもたちの夢として出てきました。

⑧　日比国際児の子どもたち（8月）

パートナー団体バティスセンターの活動に参加する子どもたち7人が、子どもの権利について学びました。二つの国の間に生まれながら、二つの国籍を享受できていない子どもたちが大多数で、認知をしてくれない日本人父や、国籍を簡単には与えてくれない日本という国に対して、複雑な揺れる思いを抱えている子どもたちの様子が伺えました。

（2）「アイキャン第１回子ども議会」開催（10月）

10月の2日間、ジェネラル・サントス（3名）、ピキット（3名）、ブストス（4名）、ジェネラル・サントス郊外のブラアン集落（3名）、サンイシロ（4名）、パヤタス（5名）の6事業地の子たち、及びフィリピンNGO下で教育支援を受ける身体的障がいを持つ子どもたち（4名）と日比国際児（4名）を含む計30名がマニラに集まり、「子どもが描く理想の地球」について議論しました。演劇を通じて紛争や経済的困窮、医療設備の不足、家庭内暴力、学校での差別など子どもたち自身の経験している課題を表現しました。工作、絵や作詞・作曲などによっても、「理想の地球」を表すことができました。そして子どもたち自身が今声をあげることに意義があると、「子ども宣言」を発表しました。

（3）「子ども使節団」のフィリピン訪問（12月）

12月後半、愛知県の中学生5名が「子ども使節団」として訪比しました。路上の子どもたちのセッションを見学し、パヤタスの子どもたちとの交流の時間を持ちました。そして、アイキャン事業地の子どもたち15名と、互いを理解し、課題を共有し、ともに理想の社会を考える2泊3日のワークショップに参加しました。ともによりよい世界を作る対等なパートナーとして、絆を深めることができました。

（4）フィリピン国レベルの「子どもの参加」促進

NGO，政府機関、国連機関と連携し、フィリピンの国レベルで「子どもの参加」促進について議論し、諸団体の経験について互いに共有しあいました。

（5）特記事項

この事業を通して、子どもたちは、国や文化を超えて、互いに経験を共有することによって励ましあい、力を与え合うことができました。そして、子どもたち自身の言葉で、社会の課題をあげ、その対策を提案することができました。子どもたちの力を改めて実感し、子どもたちが事業の主体となることの重要性を認識した年となりました。

（6）2009年の展望

今後は2008年に生まれた事業地間、そして国を超えた子どもたちのつながりを、更に活動に生かしつつ強めていきます。

Ⅱ、ごみ処分場周辺での地域開発プログラム

１、パヤタスでの保健・医療事業　２、パヤタスでの生計向上事業

（1）事業概要

マニラ首都圏ケソン市郊外にあるパヤタス地区には、フィリピン最大のごみ処分場があり、周辺には約1万人が生活しています。ごみ処分場でリサイクルできる資源を回収し販売することで生計をたてようとしている人が約3，000人いますが、その収入は法定最低賃金の1／3程度しかなく、必要最低限の暮らしを保つのも困難な状態です。また、劣悪な生活環境によって、住民は様々な健康被害を受けていますが、適切な治療へのアクセスが限られています。このような背景から、アイキャンは処分場に近い場所にケアセンターを建て、医療と生計向上の事業を実施しました。2007年までに、医療事業は地域の保健環境向上に強い関心を持つコミュニティヘルスボランティア（CHV）と呼ばれる住民ボランティアがほとんどの活動を担う体制になっています。2010年には事業の運営も住民に移行できるよう、2008年は母体となる協同組合が設立されました。

（2） 実施体制

2008年も引き続きJICAの草の根パートナー事業として、マニラ事務所が事業実施、管理。

（3）実績

1） 保健･医療活動

① 定期診療（毎週火･土）

100回実施、患者数延べ3083名（うち17歳以下男性994名、女性1188名、17歳以下男性251名、女性650名）

② 妊産婦検診（月2回）

妊娠前･後の母親の定期検診や予防接種、家族計画の相談などを実施。23回、患者数延べ605名

③ 地区巡回診療 （月1回）

コミュニティを巡回し、新生児を含む子ども、妊婦の検診、予防接種（ジフテリア、BCG、肝炎、はしか、OPV、破傷風）、ビタミンA投与等や患者フォローアップを実施しました。

④ 結核対策DOTS（直接監視下短期化学療法）

CHVがDOTSのパートナーとして、交代で患者の日々の服薬を家族と共にモニタリングしました、また結核教育をして地域内で結核治療の方法と、患者･患者家族への理解を深めました。

⑤ 外部診療補助（随時）

高度な治療を必要とする患者（心臓病、てんかん、小児結核、小児麻痺、肺気腫など）に、検査費や交通費、医療費の補助、通院付き添い等の外部診療補助を提供しました。

⑥ コミュニティヘルスボランティア（CHV）への医療費補助

ヘルスボランティアとして、常に病気感染の危険に晒されながら医療サービス運営を担う住民に対して、交通費や各種検査費の補助を実施しました。

⑦ 特別医療活動

No.	活動	実施数	受診者数
1	子宮ガン検診	1回	70名
2	体重測定	1回	78名
3	割礼手術	2回	72名
4	寄生虫駆除	7回	700名
6	ビタミンA投与	2回	208名
	合計	—	1，128名

⑧　保健教育

- 定期診療の待ち時間中の患者を対象に、CHVが結核や風邪、デング熱等の感染症の症状と対策など地域に多い病気に関する知識を伝えました。38回、688名。
- 青少年教育活動の子どもたちが、栄養や健康の知識、正しい歯磨きの方法を学びました。13回、351名。
- 栄養改善活動に参加する母親を対象とした母親学級で栄養、家族計画、肺炎、デング熱や腸チフス、子どもの養育について取り上げました。10回、191名。

⑨ コミュニティヘルスボランティア（CHV）を対象として、プライマリーヘルスケアや地域の医療作りに関するトレーニング、また薬剤師による服薬管理に関するセミナーを実施しました。3回、延べ24名。

⑩ 預かり保育（2007年までは栄養改善として実施）

月曜から金曜まで週5日、初等教育に入る前の幼児の預かり保育を実施し、26名の幼児が参加しました。また、栄養不良児や小児結核などの病気をもつ子どもに栄養改善活動（フィーディング）を継続しました。

⑪ ネットワーキング

バランガイヘルスセンター（保健所）、ケソン市保健局、フィリピンポリテクニック大学、サントトマス大学、日本結核予防会、国際協力機構（JICA）との協力体制を強化しました。

3） 協同組合設立

協同組合の正式な政府登録を完了させ、保健医療事業を将来住民が担っていくための受け皿作りを進めました。

① 協同組合定例会議　24回、延べ500名。

② 協同組合の組織強化トレーニング　5回、延べ99名。

③ 協同組合が政府登録完了。

④ 選挙による正規役員の選出　1回、29名。

4） 生計向上事業

① ICAN主催職業技術訓練の実施。8回、延べ115名。（布巾作り、お菓子作り、液体洗剤作り、紙作り訓練など。）

② 外部職業技術訓練への参加支援。2名。（私立サムソン大学への美容及び整髪/洋裁技術コース）

5）青少年活動 （毎週土曜日）

毎週土曜日の活動のほか、紙作りや、応急処置の技術訓練演劇ワークショップなどを開催。平均参加者70名。

（3） 特記事項

従来行ってきた保健医療サービスを引き継ぐ主体として、協同組合の組織化を進めました。CHVを中心とした医療チームに加え、「預かり保育」に関わる教育チームが育ちつつあります。協同組合の正規役員も選挙で選ばれ、これにより多くのコアメンバー（組合員）がコスト意識を持って活動を「経営者の視点」で見て運営できるようになりました。また今期は、前年度に住民の間で出された技術訓練のニーズ・希望を元に、職業技術訓練を本格的に開始しました。

（4） 2009年の展望

2009年は、協同組合が運営母体として活動を持続運営するため必要な資金捻出の鍵となる「住民薬局」の設立・政府登録を行い、この薬局の運営を成功させることに注力していきます。さらに技術訓練と起業支援を広げて、住民が収入の道を獲得できることを目指します。これらにより、パヤタス住民が置かれている健康面と経済面の状況の改善をさらに進めていきます。

Ⅲ、相互理解を促進するプログラム

1、国際理解教育（開発教育）事業

（1） 事業概要

幅広い事業を行うアイキャンの特性を活かし、日本に住む人々とフィリピンに住む人々の経験をお互いに共有することによって、社会の中で弱い立場に置かれた人々の「現実」に即した社会問題の理解を促進する教育事業を実施しました。また、このような問題を「自分の問題」として、解決に向けて様々な立場で主体的に取り組むことができる人材の育成を行いました。

（2） 実施体制

日本事務局が全体の管理を行い、報告会や海外研修はマニラ事務所が、その他の活動は日本事務局とボランティアが中心に他機関・団体と連携の上実施。

（3） 実績

1） 学校での授業 8件

愛知高校、岡田小学校、日本福祉大学付属高校 津島西小学校、金城中学校、桃陵中学校、日本福祉大学、愛知淑徳中学校

2） イベントなどでのワークショップ・講座・その他 13件

2050年担い手講座、日本語の会、熱田ロータリークラブ、アジアの風に吹かれて、生物多様性フォーラム、ローターアクトクラブ合同チャリティコンサート、NGOスタッフになりたい人のためのコミュニティカレッジ説明会、地球子ども会議、大須ロータリークラブ、JICA教師海外研修事前研修、中京大学ドリームトレジャー、日本平和学会、国際協力カレッジ

3） 事務所訪問受け入れ 6件

犬山中学校、江南北部中学校、若水中学校、県立岐阜高校、橋北中学校、光が丘高校

4） 自主企画

4月：現地スタッフ野村帰国報告会、10月：現地スタッフ森崎帰国報告会、現地スタッフW帰国報告会（森崎、マデット）、5月、6月、11月：はじめましてICAN

5） フィリピンの子どもたちへの文具寄付による交流

学校・団体から7団体、個人から10名

6） 海外研修の受入れ

拓殖大学ファシリテーター講座、中央大学、Bridge スタディツアー、FASID「国際開発入門コース」海外研修、聖路加看護大学フィリピン研修、JICA 教師海外研修プログラム

7） TULAY PROJECT絵手紙大会

日本とフィリピンの子どもたち約5，000人が「楽しい瞬間、嬉しい瞬間」と題した絵手紙を描き、名古屋のイオン大高店やマニラの小学校等で展示会を開催しました。

（4） 特記事項

愛知県内の中学校や企業との結びつきが強められ、活動の幅がとても広まった一年でした。事業説明会の実施はボランティア主体で、学校での国際理解教育の授業はインターンが中心となっておこなうシステムを構築できた一方、職員は「NGOスタッフとして働くこと」についての講演会や取材が多かったのが特徴的でした。

（5） 2009年への展望

引き続き、中学校や企業との結びつきを強め、「行動に結び付く」国際理解教育を提案していくとともに、新しいことにチャレンジしていきたいと思います。

2、フェアトレード事業

（1） 事業概要

アイキャンのパヤタスごみ処分場での生計向上事業から2005年に独立した女性フェアトレード生産者団体の女性たち（SPNP：パヤタスの生計向上のためにがんばる母親達）とともに、生産・購入過程における①生産者のエンパワメント、②生産者の収入向上、そして販売過程において③貧困問題に対するメッセージ性と④収益性、⑤「できること（ICAN）」の実践としての場の提供を目的として、フェアトレード事業を行いました。

（2） 実施体制

日本事務局、マニラ事務所が他機関・団体の協力を得て事業実施、運営。

（3） 実績

SPNPの団体運営を支え、モニタリングを行いながら、商品開発やバザーの出展を補助しました。またSPNPのフェアトレード製品を買い上げ、日本とフィリピンでイベントや学校祭、事務所、ホームページ、また委託契約を結んでいる店舗を通じて販売しました。その結果、多くの方々に貧困問題の深刻さや公正な貿易の必要性、そしてアイキャンの理念や活動を知っていただく機会を提供できました。

1） 委託店

① 継続12店舗

オゾン、ぎたんじゃり、チャパカ、ドリーム、名古屋YMCA、くれよんBOX、バオバブ、kogomi、ワールドジャンクション、まなかまな、風“s、飛騨高山テディベアエコヴィレッジ、

② 新規4店舗

睦和（むーあ:ネットショップ）、茶一民、JICA地球ひろば、KERA TO HOME

2） イベント等での販売（委託含む）

想念寺、ぼらんぽ交流会、アースデイ愛知2008、連合フェスティバル2008、おひさまアースデイ、児童労働撲滅キャンペーン、名大祭、SPOT&LINE、キャンドルナイト、中京大学、マイカルユニオン、古河一高、覚王山まつり、ボラみ展、Ruff，AHIオープンハウス、ワールド・コラボ・フェスタ2008、グローバルフェスタ2008、南山大学学園祭、岡山報告会、武豊町まつり、スマイル記念日、平針教会バザー、アリスガーデンアートマーケット、日本大学、RUFF、愛知大学、たこさい、拓殖大学、ACT21

3） フェアトレード勉強会の開催

アイキャン主催フェアトレード勉強会（10月）

（4） 特記事項

委託店が新しく4新店増加するとともに、学園祭を通じての販売が広がる一年となりました。後半からは、フェアトレード勉強会も行われ、翌年以降の当事業発展の基盤をつくることができました。

（5） 2009年への展望

フィリピン各地のより多くの生産者、そして日本のフェアトレード関係者とより幅広いネットワークを確立することにより、今まで興味を持たなかった層への認知度、理解度を促進します。インターン、ボランティアを中心とした運営を促進し、活動をより活性化させていきます。